

図画工作科における「動き」に関する教材開発—「触覚」と「揺れ」に注目して—

蝦名敦子

Developing Art Educational Materials for Art and Crafts Classes Involving “Movement” : A Focus on
“Sense of Touch” and “Swaying”

EBINA Atsuko

本考察は、小学校図画工作科高学年の学習指導要領 [共通事項] に明記されている、造形的特徴—「動き」に注目した教材開発についてである。これまでの生き物の「立体」づくりから、動きを伴う「工作」の表現領域に取り組んだ。「動き」の教材については、学習指導要領（以後「要領」と略す）や図画工作科教科書、他教科（小学校理科）との関連から考察する。教材を開発しモデルを作成すると共に、実際に一般参加者を対象としたワークショップで実践し、その有効性を検討した。そして改めて、要領の [共通事項] における「動き」の造形的特徴に着目し、それが小学校高学年に位置付けられている点についても、その妥当性を検証した。教材は次の4パターンのもので作成する。1. 作品の一部が動く形、2. 重り（起き上がりこぼし）、3. 磁石、4. ヒモやゴムの組合せ、である。

その結果、本教材が特質とする「動き」の題材は、図工科教科書には見られないが、理科の教科とは内容的に密接に関連していて、本教材は図工科と理科との合科的な意味合いを併せもつ。小3理科で学習する「動き」について、同学年の児童の造形活動を見てみると、両者の教科の違いを改めて認めることができる。彼らは動きのあるモデルを観察して、その仕組みがどのようなになっているか、繰り返し動かしたりして知的な観察はできる。重りも何度も計量したりして、いわば実験を試みている。また、展示作品を見てどれがよいと思うか、自分が何を作ってみたいか、鑑賞しながら面白さやよさを味わい選択ができる。しかし、自分の選んだ生き物に、さらに動きを取り入れて作ったり表現したりすることができるかと問えば、そこには子供の発達過程における段階の違いが顕現してくる。「動き」を知識として理解できる段階と、実際に創造的に作り出すことができるようになる段階である。

造形表現においては、指や身体的な感覚を通した試行錯誤が必要となる。手の感覚と機能（触覚）が発達し、巧緻性も高まる中学年から材料や用具を使いこなせる技能が定着し、さらに高学年の「ものの動きやバランス」を意識して、仕組みを考えながら創造的に作り出す過程へと進むのである。理科と図工では、「動き」に関して、習得されるべきレベルが異なってくるのが判明する。

立体物と材料の工夫で生まれる新たな動きが、その生き物本来の動きにマッチすると、一層リアリティを増すところに本教材の造形的な面白さや楽しさがある。選択するモチーフやその大きさ、学習課題の設定など、題材化の仕方によっては、幅広い年代の子供に対応できると思う。また、中学年の児童は「動き」に関して、観察を繰り返し試しながら理解しようとする。その仕組みを理解して自ら創造的に作り出すのは、本教材実践からは一部の4年生と高学年の児童であることが確認された。図工要領には、造形的特徴としての「動き」が高学年の内容に位置付けられているが、その発達段階的な妥当性が確かめられた。